

「美人コンテスト」が行われた

上田昌史(国立情報学研究所情報社会相関研究系助教)

日本で初めて「美人コンテスト」が行われた、といっても情報通信の分野での出来事である。これまで、無線通信の分野では、事業免許と申請の数が、偶然、いつも一致していたので、コンテストの必要はなかったわけだ。しかし、総務省が二・五ギガヘルツ帯の電波を使った通信事業を行いたい事業者を募集したところ、二つの免許に対して四事業者が事業申請をしたのだ。そこで、審査(比較聴聞方式)を行い、どの事業者に免許を交付するかを決める必要が生じたのである。

「美人コンテスト」とは

もともと、「美人コンテスト」は、イギリスの経済学者ケインズ(一八八三—一九四六)が一九三六年に著した『雇用、利子、および貨幣の一般理論』という著書の中で紹介されている。つまり、プロの市場参加者は、自らの意見や好みよりも一般参加者の意見に従って行動する。ちょうど、百人の中から六人を選ぶ美人コンテストを行い、当選者の組み合わせに最も近い投票を行った人に賞品を出す新聞懸賞

と構造が似ている、と述べている。

まさに、今回の免許は次世代の無線通信事業の一つの核(美人)になると期待されているワイマックスなどの広帯域移動無線アクセスシステム事業者に与えられる免許なの



で、事業性だけでなく、日本社会全体の利益になるような観点(サービスエリア展開、財務基盤、優れた技術、さらにはネットワーク開放など)で評価する必要があり、美人コンテストが導入された。また、競争促進の観点から入札が携帯電話事業者以外に限られたのも今回の特徴である。

よりよい制度設計に向けて

一方、英語圏の国々などでは、オークション方式を採用する国が増えてきている。確かに、経済学で用いられる情報の流通や取引がスムーズに行われる「完全市場」では、最適な配分が実現される(いわゆるコースの定理)はずだが、実際にはそううまくはいかない。免許取得に投資しすぎてサービス開始が遅れた(ドイツ)、たいへん安価な落札が行われた(ニュージーランド)といった問題が生じ、ゲーム理論を応用して制度変更の検討が行われている。

日本では、今後も帯域の再割り当てが予定されている。しかし、美人コンテストには審査方法に対する不満、オークションには制度設計の失敗の危険性などの問題がある。どのように分割した帯域をいつ誰にどのような方法で割り当てるか、さらには、競合や補充する帯域の取り扱い、独占や結託の防止、割り当て後の再取引といった多くの課題がある。課題を解決して「真の美人」を探る新しい方法論の模索はまだまだ続きそうである。

情報から知を紡ぎます。

NII

国立情報学研究所ニュース(NII Today) 第39号 平成20年3月

発行: 大学共同利用機関法人 情報・システム研究機構 国立情報学研究所 <http://www.nii.ac.jp/>

〒101-8430 東京都千代田区一ツ橋2丁目1番2号 学術総合センター

編集長: 東倉洋一 表紙画: 小森 誠 写真撮影: 由利修一 デザイン: 鈴木光太郎 制作: サイテック・コミュニケーションズ

本誌についてのお問合せ: 企画推進本部広報普及チーム TEL: 03-4212-2135 FAX: 03-4212-2150 e-mail: kouhou@nii.ac.jp